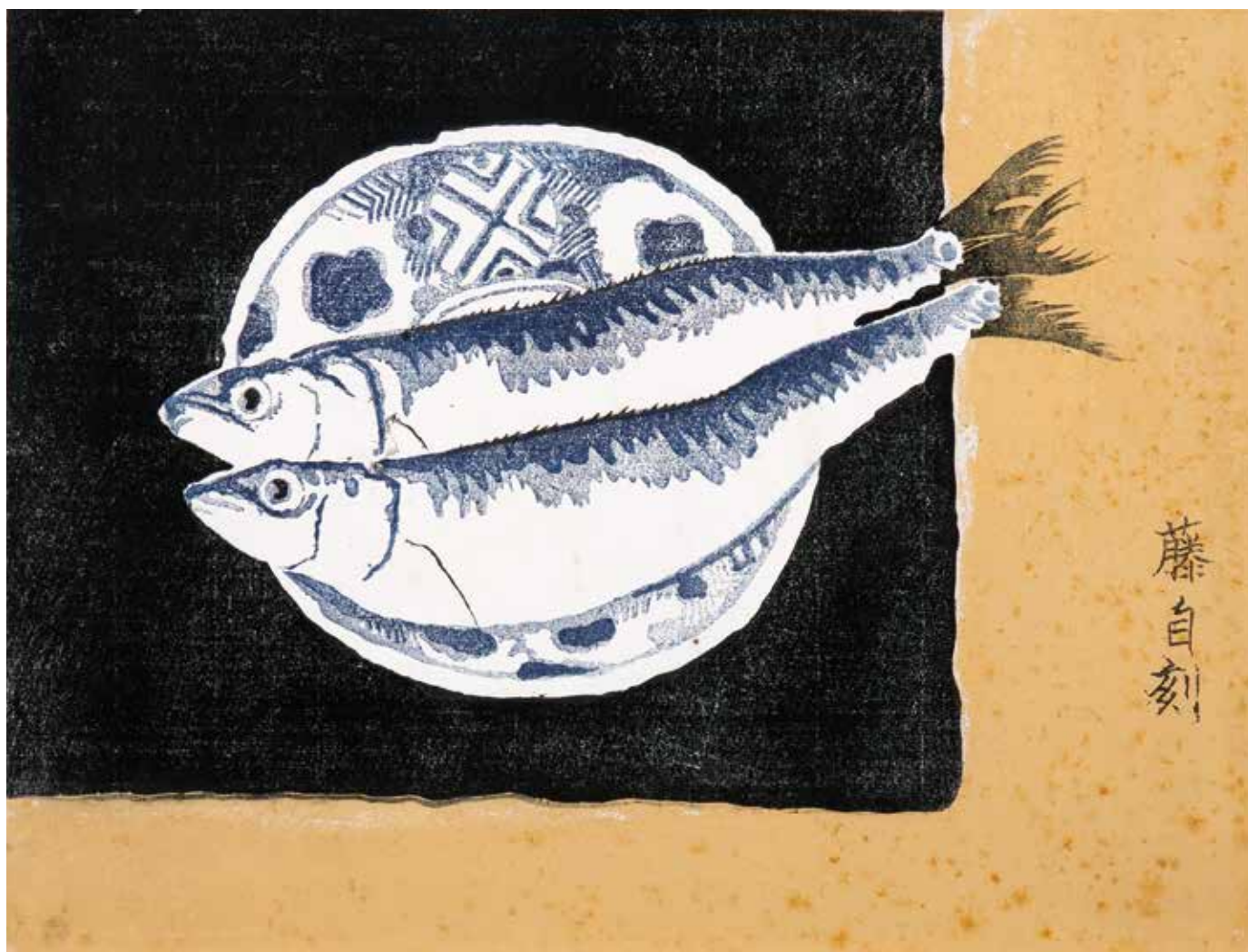


news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2018 092



亀井玄兵衛《鱒》1927(昭和2)「なつやすみの美術館7 すききらい、すき？きらい？」展より

夏の恒例となった「なつやすみの美術館」展。早くも7年目、7回を終えました。この展覧会では、大人も子どもも一緒になって、美術や展覧会を楽しんでもらおうと、毎年さまざまなテーマを設けています。これまでのテーマは、作品の持つ意味やコンセプトにつながり、また美術作品を理解するための切り口となるキーワードを示すものでしたが、今回のテーマは「すききらい、すき？ きらい？」としました。つまり作品の側ではなく、作品を見る私たちの反応を、初めてテーマにしようとしたのです。ここではその意図と展覧会の構成を報告します。

子どもたちにとって「すききらい」は、してはいけないことの代名詞でしょう。普通は(食べ物のすききらいを指しますから、身体の成長のためには)「すききらいせず食べなさい!」と、筆者も幼い頃、母によく言われたものです。そして、きらいなものを食べずに(選ばずに)済む大人を、うらやましく思ったりもしました。勉強だってそうです。きらいな科目だからといって逃げるわけにはいかず、けれども本当はすきな科目だけ取り組めたらいいのにと、夏休みの宿題リストを前にしてため息をついたのは誰しものでしょう。自分自身の経験を思い出してみても、子どもたちにとって「すき」や「きらい」は、きっと身近な言葉であるはずだと確信を持ちました。

翻って現代は、できるだけ「きらい」を遠ざけて、「すき」だけに触れていられる時代です。両手でおさまる程度のチャンネル数が限られたテレビではなく、あるいは限られた紙面の新聞でもなく、インターネット上の膨大な情報から、自分好み

のものだけを選んで見ることができます。苦手なものや見たくない／聴きたくない情報は、選ばなければ触れずに済ませることもできそうです。ひとりひとりが触れる情報が選択的になって、結果的に狭い世界に陥りかねない時代なのかもしれません。そうならないために必要なのは、自分の「すき」や「きらい」が、他の人にとってはどう感じられるのかを想像すること。そして「きらい」だと思って目を背けていたことが、もしかしたら食わずぎらいかもしれないと気づくこと。そのようなヒントを美術館は生み出せないだろうかと考え、展示室で作品を前に、さまざまな人が意見を交わしている姿を期待しながら、この展覧会を企画しました。

そこでまずは1章を「みんなのすききらい」から始めることにしました。このコーナーでは、食べものやどうぶつ、女の子などをモチーフにした作品を展示しました。展示室を覗いていると、「かわいい」、「おいしそう」、「気持ち悪い」、「なんだか変」など、ストレートな意見が飛び交います。自分のすきなもの、きらいなものは何なのか、白黒をつけるだけでなくどうしてそう感じるのか、その理由にまで目を向けてもらう機会を目指しました。

2章は「すきなきもちのいろんなかたち」とし、作品の中に表されたさまざまな愛情表現を紹介しました。友人や家族、恋人に対する「すき」の気持ちは、食べものの「すき」とは違います。うれしかったり、さみしかったり、悲しかったり、腹が立ったり……複雑で割り切れない気持ちは、美術作品のなかに数多く表されます。展示を見た方たちは、そんな気持ちに向き合って、「この気持ちってなんだろう」と考えてくれたでしょうか。

3章「わたしだけのすき」は、ちょっと変わった「すき」の表れです。自分だけがすぐすきなもの、他人とは共有できないこだわり、病的にくりかえしてしまうことなど、とても個人的な「すき」は、しばしば美術作品となって生み落とされます。人間は、「すき」の感情を持って、なにかを作ることができる唯一の生物だからです。制作者の気持ちを考えつつ、自分にはそういったこだわりの「すき」はあるだろうかと思いを巡らしてもらいたいと思いました。

作品の展示としては最後のコーナーとなる4章『べつに』ってなに?』には、「これ、なんだろう」、「よくわからないな」と思われてしまいそうな作品を展示しました。つまり、具体的に何が描かれているとは言えない作品や、何を撮っているのかわかりにくい写真などです。こういった作品に対しては、「すき」と「きらい」の判断ができないときに私たちがよく使う「べつに」や「ふつう」、「びみょう」といった言葉が投げかけられるだろうと予想したのです。しかし蓋を開けてみると、世代によって反応が大きく違っていることが分かりました。確かに大人たちはわかりにくいといった反応をしていましたが(興味深いことに、この章を「現代美術のコーナー」と呼ぶ人が多くいました)、低年齢になるほど、「なんとなく、すき」と肯定的に受け止めていたことが印象的でした。

展覧会の最後には、ここ数年続けているワークスペースのコーナーを設けました。今年はビンのかたちを印刷した用紙に、用意した50色の色紙を使って、展示作品の中から気に入った作品を表したり、あるいは自分の「すき」をかたちに表したりするという「すきあつめ」と名付けた活



展示室の様子





ワークスペースを一周するまでになった「すきあつめ」

動にしました。それを展示室の壁に各自が貼り付けるようにしたところ、予想をはるかに超える数のすきあつめが集まっていきました。閉館後、他の学芸員の手も借りつつ、何度も何度も空いている壁に貼り替えを行いました。最終的にはワークスペースをぐるりと一周取り囲むように、1700枚ものすきあつめが集まったのでした。創作欲求と「すき」の気持ちがつながった結果が示されたように感じられました。

さて今回もそうだったように、近年の「なつやすみの美術館」展ではいつも、時代もジャンルも全く異なる組み合わせで作品を並べた上、歴史的な知識を伝える解説は一切提示していません。それには少し理由があります。

美術作品を見たときの経験、これを鑑賞と呼ぶことができますが、それは見る人の個人的経験に左右されるはずで

それならば見る人によって、作品の意味は変わって当然でしょう。今年のテーマ「すききらい」は自分自身から出発するためのキーワードでもあります。歴史的価値とは違うところにも美術の価値は生まれること、美術とはそういった自分の中

での価値を生み出す行為でもあることを、展示を通して楽しんでもらいたいと考えているのです。

毎夏の展示が、その機会をもたらせるよう、続けて行きたいと思っています。

(青木加苗)



他の人が作った「すきあつめ」をじっくりと見ている姿が多くありました

「だいすきをぶっこわせ！ キライに変身?! スきなもの」

2017(平成29)年8月12日(土)

「なつやすみの美術館7 すききらい、すき？ きらい？」展の関連事業として、出品作家の間島領一さん^{まじま りょういち}を講師にお招きしてのワークショップを開催しました。今回は、展覧会のテーマである「すき」と「きらい」について、じっくり向き合えるような機会にしようと、間島さんやスタッフとの話し合いのなかから生まれてきたのが、「すき」なものを「きらい」に変身させるというワークショップです。

私たちは、普通、すきなものを作ります。すきだから作り、そして作ったものには愛着が湧きます。ではきらいなものを作ることは可能でしょうか。きらいなものを作ったはずなのに、なぜか大事に思えてしまう、そんな複雑な感覚を子どもたちはどう捉えるのだろうか、手探りながらワークショップを組み立てていきました。

まず、参加者には、「だれかにあげたいすきなもの」をひとつ、持ってきてもらうことにしました。条件は、生きものや食べ物ではないこと。そして本人が両手で持てるサイズ、重さであり、すぐに壊れてしまわないものとししました。これを他



長いひもに「すきなもの」をつないで、くじびきをします

の参加者と交換し、自分のきらいなものに変身させていくのです。

ウォーミングアップとして、ワークショップのはじめには、食べものや生き物、色、教科などについて、自分のすきなものときらいなものを書き出しました。その後、展示室でさまざまな技法を用いた作品を見て、これから行う「変身」のヒントを探します。何かをくっつけたり、色を変えてみたり、どんなことができるだろうかというアイデアをひねり出します。

後半はだれかが持ってきたすきなものを交換するくじびきから始まりました。それぞれに長いひもをつけ、ひもの真ん



間島さんに相談をしながらの制作



だれかすきなものを、きらいなものに変身させていきます

中部分を隠し、遠くから引っ張ります。自分がどれに当たるのか、自分が持ってきたすきなものが誰に当たるのか、ドキドキするくじびきとなりました。

いよいよ制作です。会場にはそれぞれが思いついたアイデアを自由に形にできるよう、「きる」、「ぬる」、「くっつける」の3つのエリアを設けました。子どもたちはエリアを移動しながら、紙粘土や木材、絵具などを用いてかたちを作っていきます。困ったときは間島さんや他のスタッフに変身のヒントをもらいながら思い思いに手を動かしますが、みんなうっかりするとすきなものを作り始めてしまいます。子どもたちは「むずかしい!」と口にしながらも、自分はどんなものがきらいなのだろうかとか試行錯誤していました。しかしたまたまくじびきで手にしただれかのすきなものを自分もだいすきになってしまい、どうにも手を加えられないと涙を流しながら悩む女の子、自分が持ってきた大切なものがどんな風に変身していくのかと心配そうに「ちゃんと持って

帰って飾ってください」と伝える男の子もいて、会場にはそれぞれの複雑な思いも渦巻いていました。

全力できらいなものを作るという経験は滅多にありませんし、難しさもあったかもしれません。しかし今回、きらいなものに真剣に向き合ったからこそ、子どもたちは作る楽しさと「すき」な気持ちの

つながりを実感していたように思います。
(青木加苗)

講師：間島領一（美術家）

主催：和歌山県・一般財団法人和歌山県文化振興財団／協力：和歌山県立近代美術館／企画・運営協力：特定非営利活動法人和歌山芸術文化支援協会（wacss）



全員で作品を持って記念撮影

美術館での鑑賞文

「鑑賞文」という言葉を聞かれたことはあるでしょうか。

読書感想文なら夏休みの宿題として書いた、いや書かされた、という思い出をお持ちの方が多く、というよりほとんどの方がそうだと思います。

鑑賞文の方は、毎年全員に宿題が出されるほど一般的ではないようです。けれども、俳句や詩について、その内容や表現を文章にしていく授業は国語科の中で行われており、そう言えば習ったと思われる方も少なくないでしょう。

この鑑賞文を美術作品について書く取り組みが、小中学校の国語科で増えてきています。

文学作品の鑑賞文では、文章で書かれていることを読み解き、その内容を自分がどのように理解したかを文章にしていくことになります。美術作品はもともと文章では

なく、形が造られているものですから、形や色から内容や意味を読み解き、解釈を加えて文章にしていくことになります。

言葉で説明すると簡単になりますが、何が描かれているのか、なぜそのような形が生み出されているのかを作品から読み取っていくことは、練習と経験を積み重ねられるようにならないもので、だからこそ学校で教える意味があると言えるでしょう。

現行の学習指導要領では、小学校の第3学年及び第4学年の内容の一つに、「図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話したり、聞いたりすること。」が掲げられています。また小学校6年の国語科では、高畑勲さんが《鳥獣戯画》について書かれた文章が掲載された教科書を使われている学校が多く、絵を見て言葉にしていく授業が行われています。

美術館で実物の作品を見て鑑賞文を書い

てみるという授業への取り組みも始まっています。

実際に児童、生徒の皆さんが書かれた文章を美術館で紹介する機会もありそうです。

ただ、鑑賞文にしても感想文にしても、多く取り組まれている割には、こういったものであるという明確な定義がなされていないようです。宿題の読書感想文で苦しんだ経験をお持ちの方の多くが、何を書けば良いとされるのかわからないという感想をお持ちらしいということが、それを裏付けています。

作品の見方は多様であってよいのですが、対象を客観的にとらえる観察力と記述に基づいて、作品を自分のものとして語る力を養えるよう、学校との協力を続けていきたいと思っています。（奥村泰彦）



「コレクション展 2017—秋」の会場で鑑賞文に取り組む小学生たち

鈴木久雄

彫刻の速度

和歌山展

武蔵野美術大学 美術館・図書館において開催された展覧会「鈴木久雄 彫刻の速度」(2016年10月17日 - 11月12日)は美しい展示だった。吹き抜けのアトリウムに置かれた《散距離》(2008)、《交叉距離》(2009)は、その広大な空間を自由に切り取りながら広がっていくような力を持ち、作品が生み出す空間と、作品を包み込む空間が一体となって、心地よい緊張感を漲らせていた。

一方、個々の作品が放つ気配は感情移入を許さない硬質なもので、その佇まいは鈴木久雄の彫刻家としてのありようを思わせる。それは石から鉄、ステンレス鋼へと扱う素材を変えながらも、部材のひとつひとつを自らの手で作り、積み上げ、組み立てるという手法を一貫して用いてきた、作者の手と作品との距離感でもあるのではない。

ステンレスはコークス炉で1200度になるまで焼き、白熱した金属塊が900度に冷めるまでの短い間に2kgのハンマーで叩いて鍛造するのだという。「6mmの中空からなる二重壁の六角柱」が《散距離》や《交叉距離》の基本的な構成要素となっているのだが、まず1.2mm厚の薄板を鍛造し、そこから6mm~10mm厚の平たい無数の四角柱を制作し、それらを溶接して六角柱の部材にする。さらに六角柱をつないでいくことで長い柱が作られるが、溶接の際に歪みを解消するため数度ずつ回転するようにずらすことで、柱はらせん状にねじれていく。膨大な時間を投入するその手作業を通じて、この彫刻家は素材を相手に黙々とした対話のようなものを繰り返しているのだろう。それは、自然の叡智に触れようとする瞬間なのではないだろうか。

「鈴木久雄 彫刻の速度 和歌山展」は、武蔵野美術大学 美術館・図書館で開催された展覧会とその図録に多くを拠りつつ、一部を再編し、新作も加えて鈴木久雄の作品21点を特集展示したものである。主眼のひとつは当館2階のテラスに《散距離》《交叉距離》を展示することだった。

テラスは当館の建築を手がけた黒川紀章にとって重要な空間と考えられ、外部



「鈴木久雄 彫刻の速度」武蔵野美術大学 美術館・図書館 アトリウムでの展示。手前が《散距離》、その奥が《交叉距離》(撮影：山本紉)

でも内部でもない、そのあいだにある日本建築の縁側を意識した空間として、黒川の「共生の思想」が端的に表れる場もある。ステンレスの大庇が重なる下、小高く木々が繁っている東側に開口部があり、グリッドを構成するように床石が敷かれ、壁面にはガラスとアルミニウム、タイルが使われている。写真と図面を見た鈴木氏からのメールには「重いひさしの下のロマネスクな空間で、建築家の横暴がよく表れています(失礼ながら)。彫刻家としては大いにファイトが湧く空間でもあります」と記されていた。

そして組み立てと展示作業には鈴木久雄氏と武蔵野美術大学 美術館・図書館で展覧会を担当した学芸員、北澤智豊氏が監修指導のため来てくださった。予定した作業工程は3日間だったが、鈴木氏の周到な計画と北澤氏の的確な指示により作業は順調に進み、ほとんどの準備は2日で終わることができた。緻密かつシステムティックに考えられた作品の構造は、手順の明快さに現れ、作業にあたるスタッフの流れるような動きを引き出し、時に大胆な作家の動きにはひそかな嘆声も漏れる楽しい現場だった。



当館での展示作業。右奥に鈴木久雄氏(撮影：北澤智豊)

和歌山展の直前に手を加えられた《木の現象 喬木》2点(鈴木氏は「刈り込み」と記していた)も同じ空間に置かれ、あらたに展示された《散距離》と《交叉距離》。それらは自由さや広がりといった最初の印象とは全く異なる表情を放ち始めた。まずその大きさと、鍛造・溶接された金属の生々しい物質感、重力に反して持ち上げられたコーン型の金属塊に圧倒される。柱が太くなったのではないかと思うほど、重量感が一層強く迫ってくる。黒川紀章が提示した場と一体化するのではなく、むしろそれぞれが負けまいと屹立している。

このテラスの展示だけは、展覧会の終了後も残される。天候や時間によって光が移ろい、見え方が変化する新しい展示空間を、ぜひ体感していただきたい。

(井上芳子)

鈴木久雄 彫刻の速度 和歌山展

会期:2017(平成29)年6月14日(水)~9月10日(日)

主催:和歌山県立近代美術館

協力:武蔵野美術大学 美術館・図書館

会場:当館エントランスホール、大階段、ホワイエ、テラス

関連事業:高校生のための作者によるギャラリートーク「彫刻の逆襲」(7月29日)、作者による講演会「彫刻の速度」(7月30日)



「鈴木久雄 彫刻の速度 和歌山展」テラスでの展示(撮影：北澤智豊)

はじまりはおわりのはじまり・おわりははじまり

特集 はじまりの景色 2018 (平成 30) 年1月4日 (土) — 4月15日 (日)

1月から4月は、新しい年を迎え、学校でも仕事でも年度が改まる時期です。当館も4月から新年度です。この展示はちょうどお正月から始まりますので、所蔵作品を中心に美術作品を「はじまり」という視点から見直して、みなさまに心の春を感じていただこうと計画しました。美術作品のさまざまなはじまりに、ご覧になる方それぞれが向き合っている、「はじまり」と重ね合わせていただくと嬉しく思います。

春は私たちの生活と心に、何かがはじまる感じをもたらします。美術作品のなかにもさまざまな意味で「はじまり」が感じられる作品があります。春や朝、芽生えや誕生をテーマにした作品もそうですし、線や色、かたちという、造形のはじまりになる要素をとくに取り上げた作品、一人の作り手が初めて作った作品もあります。

展示は、春や朝、芽生えや誕生、こどもの姿をテーマにした作品ではじまります。春を描いた作品は、コレクションのなかにもたくさんあることに驚きました。春の景色は、作り手にとっても心を動かされるものなのでしょう。一年中、いつも制作を続けているからこそ、冬の間眠っているかのように見えた生命が目覚めるさまに感動できるのかもしれません。

山口八九子の《風景》(1911年頃)が描かれたのは、八九子が21歳の頃、まだ京都絵画専門学校本科に在学中のことでした。京都の人ですが、療養のため和歌山に滞在して個展も開いていた、当地と縁のある画家です。

作品をみると、風景のなかからの確に春の気配を取り上げ、温かでありながら鋭く対象を観察する目があることが感じられます。正岡子規の『ホトトギス』に挿絵や表紙絵を描き、自らも作句をした八九子らしい初期作品です。

朝の景色として、村井正誠の《ゴルフジュアンの朝》(1934年)もとりあげました。村井は西村伊作が創立した文化学院を卒業した後、1927(昭和2)年にパリへ渡って絵画を研究しており、この作品は旅行先の南仏ゴルフジュアンで取材され、



山口八九子《風景》1911(明治44)頃

帰国後に描かれました。描かれた帽子と壺、果物などの組み合わせは、滞仏中から村井が静物画で繰り返し描いていたモチーフです。

一面の青が印象的な、爽やかな朝の風景に、好みのモチーフを組み合わせただけと見ても見えますが、画面に塗り込められた不透明な青はどこか不穏です。じつは、ゴルフジュアンは軍港で、海に浮かんでいる船は戦艦です。村井が肌で感じていたという、二度目の大戦に向かおうとしているヨーロッパの空気を伝えているのかもしれません。

作り手が初めて作った作品が残っていることはまれですが、自身の制作の出発地点を探る意識を持って作られた作品はときに見ることができます。何をしようとしているかもわからないもどかしさとともに、発見の喜びが感じられる作品は、技術はおよばなくても、作り手自身が深い愛着をもって残したと考えられます。

私たちは、それぞれの生まれ合わせた時代によって、異なる美術教育を受けています。たとえば、今では写生から始めるのが一般的ですが、明治時代に日本で初めて作られた国立の美術学校、工部美術学校で学んだ神中系子は、先生であるイタリア人のフォンタネージが描いた鉛筆デッサンをまねて写し取る、模写から勉強をはじめました。

今回の展覧会では1878(明治11)年から1880(明治13)年のあいだに描かれた4点の鉛筆デッサンを展示していますが、



村井正誠《ゴルフジュアンの朝》1934(昭和9)

2点が模写で、2点が写生です。神中が描いた明治時代の東京の風景は、フォンタネージの描いたイタリアの風景のようにロマンティックです。

神中は、先生の作品を模写することを通して、どのように目の前の風景を画面に写し取るか、という以上に、どのように表現すると絵になるのかを学んでいるのです。西洋風の絵画のスタイルを通して、風景に向かう新しいまなざしを獲得しようとしている、はりつめた心のありようが見られます。

ほかに、模写を試みた例として、保田龍門と川口軌外の模写を展示しています。いずれも彼らがヨーロッパに留学した時の制作です。それまで学んできた写生をもとにした描写から離れ、新しい表現を得るために、イタリアの名画を忠実に写



展示室の様子

し取ろうとしています。保田の帰国後の作品にみられる古典的な静けさや、川口の代表作である《少女と貝殻》(1934年)のテーマと画面構成は、ここから多くを学んだものと言えるでしょう。

制作を続けていくうちに、特別なテーマを得た作り手が、同じテーマを繰り返し描き、展開させていく連作に取り組むことがあります。当館のコレクションにも、そのはじまりとしてタイトルに「No.1」と冠された作品がいくつかあります。

連作のはじまりと、その展開を見ていくと、それが、その人の仕事を続けていく支えになっていることがわかります。ここでは、村井正誠の「パンチュール」シリーズと「ウルバン」のシリーズ、吉田政次の「相対性絵画」のシリーズのごく一部分を展示しました。これらは、少なくとも十数点にのぼる連作のはじまりです。

制作を続けるうちに、描きはじめた頃の心の弾みを保ちつづけることは難しいと、誰もが想像できるでしょう。しかし、彼らは忍耐強く連作を続けます。そのなかで、自身が制作している作品の世界を追求し、作品のありかたを探っているのです。

こうした連作を見ると、制作にはひらめきばかりではなく、有機的に、意識的に継続することが必要なだと心を打たれます。ときに難渋する様を見ていると、美術は一握りの天才だけが関われるものではなく、あらゆる人にあらかじめ開かれている場所だと実感します。

そして、展示の最後には、当館の学芸員が、いまの、そして、これからの自身の研究のはじまりになると考えている作品も、あわせてご紹介しています。終わったばかりの「アメリカへ渡った二人 石垣栄太郎と国吉康雄」展の担当者は、ひきつづき、数多くいた渡米画家たちの仕事を研究していきたい、と石垣らの作品をあげました。

昨年の「動き出す! 絵画 ペール北山の夢」展の担当者は、岸田劉生をはじめとする明治・大正の作品をあげ、彼らがいかによく学び仕事をしたかを、いま紹介していく意味を大切に考えています。

谷口香嶠の作品を選んだのは、今回のコレクション展のなかの「特集 院展の画家たち I」の担当です。香嶠は中辺路出身の野長瀬晩花の師匠であり、明治から大正初期の京都画壇では重要な画家でした。いまはあまり知られていないその画業を発掘したいということです。

《少女と貝殻》は、いつもコレクション展でごらんいただき、県民文化会館の緞帳の図柄としても親しまれていますが2012-13(平成24-25)年の「生誕120年記念 川口軌外」展の担当者から、軌外にとって、それまでの創作を集大成した代表作であり、同時にはじまりであった、と推されました。

堀内正和の《四つの立方体(線)》(1979年)は、意欲的な教育普及活動を試みている、2017年夏の「なつやすみの美術館」展の担当者があげました。こどもたちと、この作品のなかにある、特定のかたちが見られる視点を、実際に探す試みをしたことで、美術館での美術教育は、作品解

説などだけでなく、鑑賞を体験することが重要だと強く意識したそうです。

私自身の「はじまりの景色」は、村井正誠の《ロンバルディア》(1928年)です。村井にとって、時代と国境を超える普遍的な絵画のありかたを探るのはじまりであり、風景画家をめざしていた村井が抽象絵画に向かうきっかけとなった作品です。くわしくは、当館の紀要第6号(2005年)をご覧ください。

どの人に聞いても、はじまりはその人が研究し、企画した展覧会から出てきています。展覧会は、会期が終了すればおわりではなく、おわりが新たなはじまりとなります。発表することで新たにもたらされる情報や、資料・作品があらわれ、めざましい展開を見せることができるかもしれません。これらの研究の成果として、将来、どのような展覧会をお目にかけることができるでしょうか。お楽しみになさってください。(植野比佐見)



保田龍門《模写 ティツィアーノ作「キューピッドの教育」部分》1922(大正11)



神中糸子《模写 フォンタネージ作「ローマ水道跡」》1878-80(明治11-13)



神中糸子《飯田町風景》1879(明治12)

「保存」の話をしよう。

②生きものたちと

展示室から、今回は外へ。明るい。空が鮮やかです。当館は、そばに奥山公園、目の前には和歌山城の森をのぞむ、豊かな自然環境のなかにあります。いいところです。しかし、人間にとって居心地がいいのは、人間以外の生きものたちにとっても快適な環境だということです。私は外が好きですし、生きものも好きです。しかし、美術作品を弱くする要因には「生物」もあります。

小さい順にカビ、虫、鳥、そのほかの動物たち。目には見えませんが、空気の中にはカビの胞子が漂っており、エントランスの自動ドアが開くたびに虫が入ってきます。建物のすきまには鳩が巣をつくろうとしています。彼らが直接的、あるいは間接的に、美術作品に対してなにかを「する」かもしれません。

作品にとっては一大事ですが、それらは自然の営みです。あらゆる作品を損なう可能性を極力少なくするには、締め切ってしまうのはよいのですが、それでは美術館が美術館ではなくなります。気温や明るさの問題とのおなじく、来館者のみなさんが作品に向き合う時間を持てるように、公開と保存の間で悩むことになります。

しかし、悩んでいても仕方ありませんので、働きます。まず、美術館のなかで虫やカビが生活できない環境を作ります。つまり、虫が入り込む隙間をなくし、隠れる場所をなくし、餌をなくすのです。カビについては湿度をコントロールし、栄養になる汚れ、居場所になるほこりも除きます。具体的には、空調に加えて除湿機や扇風機をつかった温湿度管理と、掃除と整頓を徹底します。あらためて書くと、方法そのものは



これが「トラップ」、罠という意味です。まさに言葉どおりの感じで、虫が捕らえられています

脱力するほど簡単です。特別な薬や器械を使う必要もない、シンプルな手段ですので、どなたでもご自宅で試せます。

作品を保管している収蔵庫を、生きものが住みにくい場所にし、その周辺の展示室、エントランスという順に、段階的に許容範囲を広くしていきます。エントランスなど、外との空気や人の出入りが多い場所まで、生きものをまったくなくそうするのは現実的ではないからです。

こうした日々の仕事は、ただやみくもにやっていたらいいものではありません。掃除などの効果があったかどうかを調べながら、作業の計画を立てていきます。たとえば、館内のいろいろなところに「トラップ」をしかけます。「トラップ」の内側には、粘着剤が塗られていて、そこに入って張り付いて動けなくなった虫の種類と数を調べています。季節の移り変わりにつれて変動する気温と湿度、またその年の気候によって、生き物の現れかたは大きく変わりますが、いつも観察していると、ある程度の予測がつき、あらかじめ対策をとることもできます。

さらに、作品を置いていない事務室であっても、窓を開けない、おやつをそのまま置かない、空のお弁当箱は密封してその日のうちに処理するなど、細々としたことをお願



トラップにかかった虫を調べています。目にみえないくらい小さな虫もいるので、ルーペを使います



監視職員のみなさんから届く「今日の虫」。この日はダンゴムシ

いしています。とくに、いつも展示室にいる監視職員のみなさんには、虫を見つけたら採集して報告してもらおうようにしています。監視職員のみなさんには、虫を捕まえるのが特に巧い人もいます。

そして、来館者のみなさんにも、館内でものを食べることはご遠慮いただいています。私たちにとっては、拾って食べる甲斐のない、ほんとうに小さなかけらでも、カビや虫などの生きものたちにとっては何日分ものご馳走だからです。できないことがあるのは窮屈だな、とお感じになるかもしれませんが、でも、いま、なにか食べることを少し我慢することが、そのまま美術作品を守っていることになります。それは、たいへん格好良いと思うのです。(植野比佐見)

Museum Calendar

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

特別展 明治150年記念

水彩画家・大下藤次郎展

2.10(土)～3.25(日)

明治期に活躍した水彩画家・大下藤次郎(1870～1911)。日本全国に一大水彩画ブームを巻き起こした画家が、各地を旅しながら残した美しい明治の風景を、島根県立石見美術館コレクションにより紹介します。

1.4(木)～4.15(日)

コレクション展 2018-冬春

特集 はじまりの景色 特集 院展の画家たち I

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページより登録いただけます。また Facebook や twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。



友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000 円
学生会員 3,000 円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当：中川

